



第244號 (第 21 卷)

(昭和16年) 10 月號

卷頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

“逝つたカノン女史のこと” など

去る四月13日、ミス・カノンが亡くなられたといふ。感が特に深い。カノン女史は1863年の生れであるから、日本流では79歳で亡くなられたのであるが、實は満77歳4ヶ月の年齢であつたわけである。勿論、之れは人として長い一生涯である。1884年にエルズリ大學を卒業して、まもなくハーバード學院天文臺に入り、E. C. ピケリング教授の下に、恒星のスペクトル分類に着手され、死の直前まで此の仕事を續けられたのであるから、まづザット半世紀の間、同じ此の研究事項に専心されたこととなる。忍耐と健康とに恵まれた婦人でなければ、誰も眞似の出来ないことである。ミス・カノンと言ふ名は、今は殆んど天文學上のクラシックであつて、バーナード、ギル、カプタイン等と共に、二十世紀の新天文學の礎石であつたと言ひたいのだが、しかし女史は決して過去の人でなく、ホンの近頃まで孜孜として働いてゐた人である。ハーバード大學は實に寶物的偉人を茲に失つたわけである。

自分がミス・カノンに最初に會つたのは1922年十二月の末、ボストン市にA. A. S. の總會が開かれ、ヤークス天文臺から出張した時であつたが、其の後、又、1923年九月の初め、英子と共に、南カリフォルニアの沖、カタリナ島に於いて、皆既日食の觀測のため、ヤークス天文臺の觀測隊に加つて、同島に滞在中にもあつた。此等の詳細は“天界”の第4—5卷あたりに記してある。それから同年の秋十一月、東部に移つて、ハーバードの天文臺に席を置くやうになつたとき、女史は、シャプリ臺長と共に、吾々を最も懇切に世話して下さつた。最後に會つたのは、1938年の夏、歐洲ストックホルムの國際天文同盟總會に於いてであつた。女史は、其の風采が往年に比べて、多少老いられたのは止むを得ないが、元氣はなかなか壯んで、昔時の如く、愛嬌もあり、諧謔を交へて、話される様子など、實に気持ちの良い社交ぶりであつた。

女史の天文研究の業績については、別に項を改めて書くつもりであるが、人としては實に明朗活潑そのもので、いつまで経つても、“壯者をしのぐ”ものがあつた。どこまでもヤンキー式のレディで、歐洲の學者（殊に、婦人）に比べると些か粗野な風があつたけれど、之れは、又、一面に於いて、一生獨身であつたために、若い娘のウブな姿と見られないことも無かつた。自分等は、或る日、女史から晚餐の御招きを受けたが、其の時の招待状といふのが、研究用紙の一片を引き裂いたもので、そこに、鉛筆で、“Mr. & Mrs. Yamamoto, We dine at five, tomorrow afternoon” といふのであつて、自分は思はず吹き出したことを、今でも覚えてゐる。

キング氏亡く、ベイリ氏亡く、グリシ氏も亦亡くなつたハーバードの天文臺は、現シャブリ臺長の統轄下に、新舊時代の架け橋として、カノン女史だけが最近まで臺内に重きをなしたのであつたが、茲に女史が亡くなつて、天文臺は全部がシャブリ時代のメンバになつて了つたわけである。

女史は、かつて米國內の十二女傑投票に入選したことのある偉人として、二十何年も前から國內に知られてゐた。勿論、世界の學人としては其れ以前から専門家の間に充分に知られてゐたが、こうした人が、國內の一般人にも知られるやうになつたのが幾年か遅れたのは、他にも例のあることで、止むを得ない。女史は亡くなつたけれど、其の偉業は、其のルーベ下に検査された五十萬の恒星のスペクトルと共に、永く、又、美しく、學史を飾ることであろう。こゝにふ女傑が我が日本にも出でんことが望ましい。

▲今年の九月の皆既日蝕のために、公私の天文家たちが何等かの研究計畫を進めてゐることは、既に世間に知れわたつてゐるが、只一つ、この日蝕と、昭和11年の時の北海道の日蝕とを比べて見て、まことに著しい違ひは、我が國の學士院や學術研究會議の會員たちが示した彼等自身の非國際性である。自分も、“或は、そんなことが、あるかも知れない!?”と多少の心がかりはあつたことだが、いよいよ蓋をあけて見て、“やつぱり左様だつたか!”と、國家學術のために慨嘆之れを久しくした仕末であつた。北海道の日蝕の時には、それでも、學研では簡単な歐文のパンフレットや地圖などを印刷して、諸外國の學者に贈り、彼等の研究と計畫とに多少の便宜を圖つた（あの時は、日蝕の案内書を歐文で作製したりしたので、外國の學者には多少のサリゲスをしたけれど、之れに反して、我が國內の學者のためには何の奉仕も、しなかつた!!）ところが、こんどの1941年の日蝕に際しては、水路部から、海圖を利用した只一枚の日蝕地圖が（しかも其れは、四五年も以前の U 氏の私的計算の數値に據つたものが）發行されただけで、其のほかには、國內の學者のためにも、國外の學者のためにも、一頁半頁の案内説明文も作製せず、マルッキリ日蝕を黙殺した如き

態度であるのは奇怪至極といふより外に言葉がない。北海道の日蝕が其れほど価値のあり、又、こんどの東亞一帯の日蝕が其れほど無價のものなのか!! むしろ之れは、學研や學士院の無責任、無定見、氣まぐれを曝露するものである。ソ聯などは昨年既に立派な日蝕案内と精しい地圖とを作製して、世界に提供してゐるのは、前回の場合も同様で、學者の國際的乃至國家的責任といふものを充分に理解してゐる當然の處置と言ふべきである。——聞くが如くんば、我が國の學研あたりでは、自己の日蝕觀測計畫のためには幾度も會議や打ち合はせを行つたに拘らず、“外國人の接待はマツピラ御免だ!!”と言つたやうなことで、何もしないことに決めたのだといふ。全く以つて、之れは、中學生などによく見受ける一種の虚榮で、實に唾棄すべき惡習であるが、我が國の學者の中には、外國語や外國人接待に自信の無いことのテレかくしに、見せる虚榮で、國家の學者たることを微塵も辨へない態度がある。こういふ連中が學界の中堅に居ては、國家を誤ること甚だしいと言はねばならぬ。外國語や外人接待のことなどは末の末である。眞に學術を愛し、國家を愛し、天文學の國際的重要性を知るものは、必ずソ聯學者の眞似でもして、何等かの日蝕案内をなすべきものである。現に1936年の時には、少なくとも形の上に於いて、一通りの義務を盡したのではないか!

自分等は、かうした學研のメンバたちによつて日本の天文學界なるものが代表されるやうに解せられるのを潔しとせず、國內の學界に對しては、“天界”第242號を特輯して、不充分ながら、多少の參考に供したと共に、海外に對しては、(目下の國際狀勢を考慮しつゝ、)去る六月3日、ドイツとイタリアとの學界へ一種の案内狀を發送し、取り敢へず樞軸國の學者たちが奮つて我が國或は東洋方面へ日蝕觀測のため來られんことを勧誘した次第である。(かの1936年の北海道日蝕の時には、チェコスロヴァキヤと支那との學者團を、本會の名を以つて招待斡旋したのは、會員諸氏の周知知つてゐられる通りである。)尤も、此の書狀の發送後、所謂獨ソ戰爭が起つたので、書信は多分あて名さきへ到着したとこと(日附けから見て)思ふけれども、返信を受けることも、實際の遠征隊を歓迎することも出来なさそうになつて了つたことは残念であるが、之れは勿論、變じ易い國際狀勢の然らしむる所で、吾人の力の如何ともなし難き所である。(1941—8—5)

訂 正

本誌 242 號の第239頁の表中、下の如く訂正します。〔急報502〕

		蝕 既		方 位		生 光		方 位	
臺 基 石	北 隆 島								
		13	41.9	149		13	43.7	213	
		13	47.9	87		13	51.2	260	